

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの 変化に関する縦断的検討

— 子どもの心理的適応との関連から —

渡邊賢二 (皇學館大学教育学部)

平石賢二 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

〈要旨〉本研究は、青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化と子どもの心理的適応との関連について4時点による縦断的な検討を行った。123組の中学生とその母親を調査対象者とした(1回目の調査時)。その結果、道徳性スキルはTime2よりTime3とTime4の方が有意に得点が減少していた。理解・関心スキルはTime1とTime2よりTime3とTime4の方が有意に得点が減少していた。クラスタ分析の結果、道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルとも4クラスタが得られ、安定したクラスタ群が多かった。また約70%の母親が道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの3つのスキルを日常的に用いていることが明らかになった。また、3スキルのクラスタ群と自尊感情、不適応感との関連を検討した結果、不適応感においては、自尊心スキル高群は自尊心スキル低群と最低群より低い得点を示した。

〈キーワード〉母親の養育スキル、子どもの心理的適応、縦断的調査、変化

【問題と目的】

青年期の親子関係は変化する。Laursen, Coy, & Collins (1998) は、青年期の親子関係は転換の時期、または再形成の時期であると述べている。落合・佐藤 (1996) は児童期から青年期の親子関係は、①親が子を抱え込む関係及び親

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

が子と手を切る関係、②親が子を危険から守る関係、③子が困ったときは親が支援する関係、④子が親から信頼・承認される関係、⑤親が子を頼りにする関係の5段階を経過して変化すると述べている。また、Steinberg & Steinberg（1994）は思春期・青年期の子どもの心身の発達的变化は子ども自身にとっての対処すべき課題であるが、それは同時に親にとっても大きな刺激や課題であり、子どもに対する態度変容が求められると述べている。これらは、児童期から青年期にかけての親子関係は変化し、その変化により親の態度変容が重要であることを述べている。すなわち、子どもの態度変容に対する親の相互調整的な養育態度の重要性を指摘している。

これまでの親の養育態度に関する研究として、Baumrind（1967,1980,1991）は要求性と応答性の2次元を見出し、Maccoby & Martin（1983）がこの要求性と応答性が共に高い「権威ある親の態度」は子どもの有能感の形成に強く関与すると報告している。その後、この養育スタイルの尺度を用いて、多くの研究が行われてきている。我が国では、辻岡・山本（1976, 1977）が、「情緒的支持」「同一化」「統制」「自律性」の4因子からなる親子関係診断尺度（EICA）を作成して、この尺度を用いた研究が行われてきている（小高, 1994など）。

これらの養育態度尺度は、子どもの心理社会的な発達を考慮に入れた尺度である。しかし、青年期の子どもと親との関係においては、子どもの心理社会的な発達への影響という側面だけでなく、先述した相互調整的な養育態度の変容という側面も重要であると考えられる。渡邊・平石（2007）は、このような観点から、青年期の子どもをもつ親の相互調整的な養育態度に焦点をあてて研究を行い、「母親が子どもとの良好な関係を構築・維持する行動」として、母親の養育スキル尺度を作成し、道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの3つの下位尺度を見出している。また、自尊心スキルと理解・関心スキルについては、中学2年生と3年生より中学1年生の方が有意に高い得点を示したと述べている。その後、母親の養育スキル尺度の妥当性も検討している（渡邊・平石, 2009）。

これらの研究は、中学1年生から中学3年生までの子どもとその母親を対象

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

に、横断的に調査を実施して、子どもの学年によって母親の養育スキルには差異があったことを報告している。しかし、岡林（2006）は発達的変化を検討する研究としては、縦断的に調査をすることも重要であると述べている。またHolmbeck（1996）とMcGue, Elkins, Walden, & Iacono（2005）は青年期の親子関係の縦断的な研究が不足していることと、縦断的研究の重要性を指摘している。我が国でも、小高・紺田（2015）が同様の指摘をしている。

そこで、渡邊・平石（2010）は、母親の養育スキルと子どもの心理的適応に関して、3時点（1年間隔）の縦断的調査を行い、道徳性スキルと理解・関心スキルについては、Time3よりTime1とTime2の方が有意に高い得点を示した。また理解・関心スキルは次年度の子どもの母子相互信頼感に影響を及ぼし、子どもの母子相互信頼感は次年度の自尊感情と不適応感に影響を及ぼしたと報告している。この研究結果は、母親が子どもの成長・発達に伴い、相互調整的に心理的な距離をとり、その心理的な距離間が子どもの適応感に影響を及ぼしたことを指摘している。またこれまでの横断的研究では得られなかった知見をこの縦断的研究によって得られたことも述べている。

しかし、渡邊・平石（2010）の研究は3時点の縦断調査であり、Time1を中学1年生から中学3年生とその母親、Time2を中学2年生から高校1年生とその母親、Time3を中学3年生から高校2年生とその母親を対象としており、Time2とTime3は中学生と高校生が混同していることになる。中学生と高校生の相違や変化を検討していない。義務教育の中学生から義務教育でなくなる高校生の親子関係には相違が考えられる。先述の落合・佐藤（1996）は中学生から高校生にかけて、「親が子を危険から守る関係」、「子が困ったときは親が支援する関係」、「子が親から信頼・承認される関係」に変化していくと述べている。またSteinberg & Silk（2002）は青年期前期から中期における親子関係は変化することを述べている。これらより、中学生から高校生とその母親を対象として、Time1からTime4までの4時点の縦断的な調査を実施して、母親の養育スキルの変化を検討することは必要であると考えられる。

また、渡邊・平石（2010）の縦断的調査では、先述したようにTime1からTime3までの母親の養育スキルの変化を検討したが、母親の養育スキルの変

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

化パターンを検討していない。青年期の子どもは、身体の成長、教科学習の困難さ、友人関係の問題、自立・自律の問題など、多様な問題や悩みを抱えており、心身とも不安定であると多くの研究で報告されている。同時に、子どもは親に対する態度や親との関係も変化させていくと言われている（落合・佐藤, 1996など）。親も子どもの変化する態度に合わせて、相互調整的に態度を変容すると考えられる。これらの青年期の子どもと親の態度変容は、子ども個々の成長・発達により、多様な変化パターンが考えられる。これらより、母親の養育スキルは子どもの成長・発達によって、個人差が考えられるため、4時点の母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの変化について類型化する。

次に、4時点の道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの変化パターンは子どもの心理的適応にどのような関連があるのか検討する。これまでは、母親の養育スキル下位尺度と子どもの心理的適応との関連の研究として、相関関係や因果関係の検討をしてきた（渡邊・平石, 2007, 2010）。しかし、4時点の変化パターンと子どもの心理的適応との関連は検討していない。4時点の変化パターンは個人差があり、多様な変化パターンが考えられる。その変化パターンと子どもの心理的適応との関連について検討することは意義があると思われる。これらより、母親の養育スキル下位尺度の変化パターンと4時点目の子どもの自尊感情、不適応感との関連について検討する。

【方 法】

1 調査対象者：2006年に三重県内の中学校10校を対象に調査を実施し、2242組の母子ペアデータの回答を得た。2007年は2006年の調査時に協力の同意が得られた母親600名に郵送法による質問紙調査を実施し、246名の返送があり、2008年は2007年の調査回答者246名に対して、2007年と同様に郵送法による質問紙調査を実施し、187名の返送があり、2009年は2008年と同様に246名に対して、郵送法による質問紙調査を実施し、123名の返送があった。この123名（回収率50.0%）を本研究の調査対象者とした。（2006年時の母親の平均年齢 42.7 ± 3.69 ；子ども：男子58名、女子65名；中学1年生43名、中学2年生43名、中学

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

3年生37名）

2 調査時期：2006年7月～8月（以下Time1）、2007年8月～9月（以下Time2）、2008年8月～9月（以下Time3）、2009年8月～9月（以下Time4）に実施した。

3 手続き：Time1は自宅で「生徒用」と「保護者用」の質問紙の回答を実施し、終了後に担任教諭に提出するという方法を用いた。Time2はTime1に実施した調査回答者に対して、今後の調査協力の同意を得た人に対して、保護者用と子ども用の質問紙を入れた郵送法による調査を実施した。Time3とTime4も同様にTime2に調査協力の同意を得た人に対して郵送法による調査を実施した。

4 調査内容：

保護者に対する調査内容

- ① 基本的属性 年齢・就労形態・家族構成・子どもの学年・性別を尋ねた。
- ② 養育スキル尺度（渡邊・平石，2007） 23項目を「1まったくあてはまらない」～「6非常にあてはまる」の6段階評定で回答を求めた。養育スキル尺度は下位尺度「道徳性スキル」9項目、「自尊心スキル」8項目、「理解・関心スキル」6項目で構成されている。「道徳性スキル」は「子どもに社会のルールを守るように言っている」「子どもに責任をもって行動をするように言っている」「子どもに約束したことは守るように言っている」などの質問項目で、「子どもに日常生活における規範、慣習、生活態度を教示したり、見守る。」と定義されている。「自尊心スキル」は「子どもにあやまるべきところは、素直にあやまっている」「他の子どもと比較して話をしないように気をつけている」「子どもの考えたことを尊重している」などの質問項目で、「子どもの気持ちを配慮したり、子どもに肯定的なメッセージや自立・成長を促進する態度を示す。」と定義されている。「理解・関心スキル」は「子どもに学校であったことなど一日の出来事を聞いている」「子どもに話しかけ、意見や感想を聞いている」「家族団らんの時

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

間を設け、家族で会話をかわしている」などの質問項目で、「子どもの態度に関心を示し、観察やコミュニケーションを用いて子どもに対する理解を深める。」と定義されている。本来、スキルとは獲得可能な技能や能力のことを示し、獲得すればするほどスキルアップし、能力や技能が優れていくことを意味すると考えられる。本研究における養育スキルは、母親が子どもに対する養育について、どの程度の行動をするのかを示す。したがって養育スキルの得点が高いことは養育スキルを用いた養育行動頻度が多いことを、低いことは養育行動頻度が少ないことを示す。

子どもに対する調査内容

- ① 基本的属性 学年・年齢・性別を尋ねた。
- ② 自尊感情尺度 Rosenbergが作成した自尊感情尺度の10項目の邦訳したもの（山本・松井・山成，1982）を用いた。「1あてはまらない」～「5あてはまる」の5段階評定で回答を求めた。但し、調査実施校との話し合いで、「敗北者だと思ふことがある」という質問項目は除き、9項目を採用した。逆転項目4項目の値を逆転させ、全9項目の平均値を尺度得点とした。得点が高いほど自尊感情が高いことを示す。
- ③ 不適応感尺度 水野・石隈・田村（2003）が中学生用適応尺度として作成した心理領域10項目、身体領域6項目、学習領域7項目、社会領域4項目、進路領域4項目の中から、本研究では不安や悩みなどに関する心理領域10項目を採用した。「1あてはまらない」～「5あてはまる」の5段階評定で回答を求めた。得点が高いほど心理的な不安や悩みがあり不適応であることを示す。

【結 果】

1. 母親の養育スキルに関するTime1からTime4までの得点差

母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルのTime1からTime4までの変化を検討するために、一要因分散分析（反復測定）を行った（Table1）。有意差がみられたのは、道徳性スキル得点

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）
 ($F(3,345)=5.12, p<.01, \eta^2=.05$), 理解・関心スキル得点 ($F(3,351)=8.91, p<.001, \eta^2=.07$) であった。Bonferroni法による多重比較の結果、道徳性スキルについては、Time3とTime4よりTime2の方が有意に高い得点を示した。理解・関心スキルについては、Time3とTime4よりTime1とTime2の方が有意に高い得点を示した。自尊心スキルについては、有意差が認められなかった。

Table1 Time1からTime4の母親の養育スキルの一要因分散分析

	N		Time1	Time2	Time3	Time4	F値	η^2	多重比較
道徳性スキル	116	M	5.11	5.16	5.06	5.01	5.12 **	.05	T2>T3,T4
		SD	.51	.50	.55	.56			
自尊心スキル	118	M	4.59	4.60	4.56	4.59	.26 n.s.	.00	
		SD	.54	.56	.57	.54			
理解関心スキル	118	M	4.39	4.43	4.24	4.24	8.91 ***	.07	T1,T2>T3,T4
		SD	.55	.53	.62	.60			

***: $p<.001$, **: $p<.01$

2. 母親の養育スキルの変化パターンの類型化

Time1からTime4の母親の養育スキル下位尺度を類型化するために、Time1からTime4の道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの標準得点に基づいてクラスタ分析(k-means法)を行った。クラスタを3つから5つに設定して分析を行った結果、解釈の可能性から道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルとも4クラスタが妥当であると判断した(Fig.1, Fig.2, Fig.3)。

道徳性スキルについて、第1クラスタはTime1からTime4までの道徳性スキル得点が平均得点より高いため「①道徳性スキル高群」、第2クラスタはTime1からTime4までの道徳性スキル得点が平均得点程度のため「②道徳性スキル中群」、第3クラスタはTime1からTime4までの道徳性スキル得点が平均得点より低いため「③道徳性スキル低群」、第4クラスタはTime1からTime4までの道徳性スキル得点が平均得点より非常に低いため「④道徳性スキル最低群」と命名した。

自尊心スキルについて、第1クラスタはTime1からTime4までの自尊心スキル得点が平均得点より若干低いため「①自尊心スキル低群」、第2クラスタはTime1からTime4までの自尊心スキル得点が平均得点より若干高いため「②自尊心スキル中群」、第3クラスタはTime1からTime4までの自尊心スキ

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

ル得点が平均得点より低いため「③自尊心スキル最低群」、第4クラスはTime1からTime4までの自尊心スキル得点が平均得点より高いため「④自尊心スキル高群」と命名した。

理解・関心スキルについて、第1クラスはTime1からTime4までの理解・関心スキル得点が平均得点より高いため「①理解・関心スキル高群」、第2クラスはTime1からTime4までの理解・関心スキル得点が平均得点程度のため「②理解・関心スキル中群」、第3クラスはTime1からTime4までの理解・関心スキル得点が平均得点より低いため「③理解・関心スキル低群」、第4クラスはTime1の理解・関心スキル得点が平均得点より高いが、Time2からTime4までの理解・関心スキル得点は平均得点より低いため「④理解・関心スキル不安定群」と命名した。以上、道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルとも4群が見出された。

また、道徳性スキル（第1：32人（27.6%）、第2：55人（47.4%）、第3：18人（15.5%）、第4：11人（9.5%））、自尊心スキル（第1：28人（23.7%）、第2：48人（40.7%）、第3：14人（11.9%）、第4：28人（23.7%））、理解・関心スキル（第1：27人（22.9%）、第2：52人（44.1%）、第3：27人（22.9%）、第4：12人（10.1%））の各クラスの人数には偏りがみられた（道徳性スキル： $\chi^2=38.97, df=3, p<.001$, 自尊心スキル： $\chi^2=19.90, df=3, p<.001$, 理解・関心スキル： $\chi^2=27.97, df=3, p<.001$ ）。

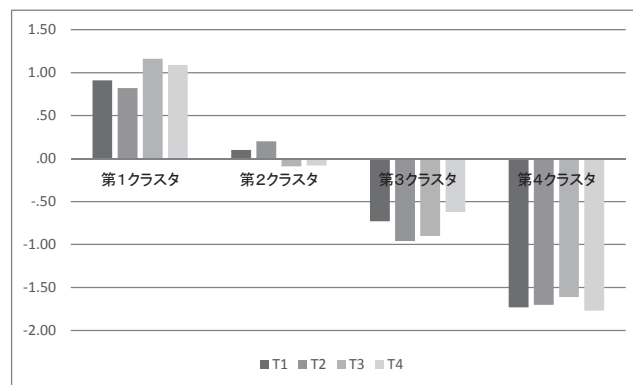


Fig.1 4時点の道徳性スキルのクラス分析

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

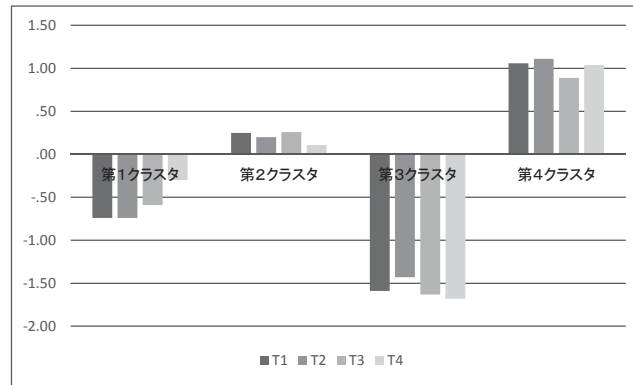


Fig.2 4時点の自尊心スキルのクラスタ分析

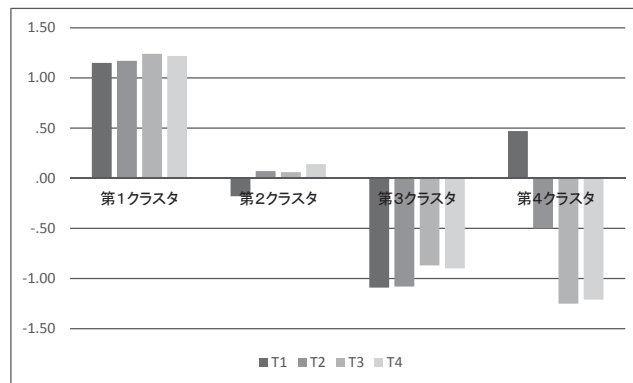


Fig.3 4時点の理解・関心スキルのクラスタ分析

3. 母親の養育スキルのクラスタ群と子どもの心理的適応との関連

母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル，自尊心スキル，理解・関心スキルのTime1からTime4のクラスタ群によって，Time4の自尊感情と不適応感の得点に差異がみられるか検討するために，一要因分散分析を行った（Table2, Table3, Table4）。その結果，道徳性スキルと理解・関心スキルにおいては，自尊感情，不適応感ともに有意な群間差がみられなかった。自尊心スキルにおいては，自尊感情では有意な群間差がみられなかった。不適応感では有意な群間差がみられた（ $F(3,111) = 4.53, p < .01, \eta^2 = .12$ ）。また，多重比

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）
 較（Tukey法）の結果、自尊心スキル低群と自尊心スキル最低群より自尊心スキル高群の方が有意に得点が低かった。

Table2 道徳性スキルのクラスタ群による自尊感情と不適応感の分散分析

		道徳性スキル	道徳性スキル	道徳性スキル	道徳性スキル	F値	η^2	多重比較
		高群	中群	低群	最低群			
	N	31	53	18	11			
自尊感情	M	3.22	3.19	3.18	3.20	.03	n.s.	.01
	SD	.54	.59	.81	.81			
不適応感	M	2.77	2.96	3.44	3.05	1.83	n.s.	.03
	SD	.93	1.00	.95	1.01			

Table3 自尊心スキルのクラスタ群による自尊感情と不適応感の分散分析

		自尊心スキル	自尊心スキル	自尊心スキル	自尊心スキル	F値	η^2	多重比較
		低群	中群	最低群	高群			
	N	28	46	14	27			
自尊感情	M	3.10	3.15	2.90	3.42	2.38	n.s.	.02
	SD	.71	.50	.84	.59			
不適応感	M	3.35	2.92	3.54	2.60	4.53	**	.12 低群, 最低群>高群
	SD	1.02	.88	.80	1.03			

**: $p<.01$

Table4 理解関心スキルのクラスタ群による自尊感情と不適応感の分散分析

		理解関心スキル	理解関心スキル	理解関心スキル	理解関心スキル	F値	η^2	多重比較
		高群	中群	低群	不安定群			
	N	27	52	25	11			
自尊感情	M	3.23	3.27	3.06	3.09	.74	n.s.	.00
	SD	.62	.56	.81	.51			
不適応感	M	2.74	2.99	3.32	2.99	1.61	n.s.	.02
	SD	1.00	.93	1.02	.89			

【考 察】

1. Time1 から Time4 における母親の養育スキルの変化

母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルの変化を検討するために、一要因分散分析を実施した。道徳性スキルについては、Time2 より Time3 と Time4 の方が有意に得点が減少した。母親は中学生から高校生になると、「子どもに日常生活における規範、慣習、生活態度を教示したり、見守る。」という行動が減少する。母親は高校生になると、中学生の頃のように、日常での規範・慣習を子どもに言わなくなる傾向があるといえる。これは、母親は子どもが大人になっていく過程で、距離をとっていると考えることができよう。自尊心スキルについては、各時点での有意差は認められなかった。母親は、中学生から高校生にかけて、継続的に子どもの気持

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

ちを配慮したり、子どもに肯定的なメッセージや自立・成長を促進する態度を示しているといえよう。理解・関心スキルについては、Time1とTime2よりTime3とTime4の方が有意に得点が減少した。子どもが中学生から高校生になると、子どもの態度に関心を示し、観察やコミュニケーションを用いて子どもに対する理解を深めるといった行動が減少していると考えられる。道徳性スキルと同様、母親は子どもの成長・発達に伴って、子どもとの心理的な距離をとっていると推察される。Steinberg & Silk (2002) は青年期前期から中期にかけて、親子関係や親との葛藤が変化すると述べており、類似した結果と思われる。

2. 母親の養育スキルの変化パターンの類型化

母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルのTime1からTime4までの変化パターンを類型化するために、クラスタ分析を行った。道徳性スキルについては、4つのクラスタ群ともTime1からTime4間にあまり変化はみられなかった。渡邊・平石（2010）の縦断研究において、時点の相関係数は.60～.70程度であり、母親の養育スキルは安定していると述べている。本研究も類似した結果と考えられる。平均得点以上の第1と第2クラスタ群に87人（75%）が属しており、多くの母親は中学1年生から高校3年生までの子どもに対して、継続的に規範や慣習を教示し、子どもを見守っている行動をとっていると推察される。自尊心スキルについても、4つのクラスタ群ともTime1からTime4間にあまり変化はみられなかった。道徳性スキルのクラスタ群と同様であった。平均得点以上の第2と第4クラスタ群に76人（64.4%）が属しており、多くの母親は中学1年生から高校3年生までの子どもに対して、継続的に肯定的なメッセージや自立・成長を促進するような行動をとっていると推察される。理解・関心スキルについては、第1と第2クラスタ群は79人（67.0%）が属しており、多くの母親は中学1年生から高校3年生までの子どもに対して、継続的にコミュニケーションをとり、理解を深める行動をとっていると思われる。しかし、第4クラスタ群（12人）は、Time1は平均得点より高いが、Time2から平均得点より減少しており、不安定な養育態度といえる。子どもの学年は中学2年生から高校生であり、子ども

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

の成長に伴って、母親は子どもとのコミュニケーション量が減少したと考えられる。宮本（2009）は中学生から高校生になると、母子間のコミュニケーション量は減少する傾向にあると述べている。これらのことも関連している可能性も考えられる。しかし、不安定な状態になった原因を本研究では明らかにしていないため、今後詳細な検討が必要になるだろう。

3. 母親の養育スキル下位尺度のクラスター群と子どもの心理的適応との関連

母親の養育スキル下位尺度である道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルのクラスター群と自尊感情、不適応感との関連を検討した。その結果、道徳性スキルと理解・関心スキルのクラスター群と自尊感情、不適応感との間には有意な関連がみられなかった。道徳性スキル高群と理解・関心スキル高群が自尊感情の得点では最も高く、不適応感の得点では最も低かった。道徳性スキルと理解・関心スキルの4時点の得点が高ければ、自尊感情が高く、不適応感が低いとは推察できるが、有意差はみられなかった。道徳性スキル低群や最低群、理解・関心スキル低群や不安定群は子どもの適応に問題が考えられるため、母子の面接調査を用いて、詳細な検討が必要であろう。自尊心スキルのクラスター群と自尊感情との間には有意な関連がみられなかったが、不適応感との間では、自尊心スキル低群と最低群より高群の方が有意に低い得点を示した。母親が継続して子どもに肯定的なメッセージや自立・成長を促進する行動を示すことは、子どもの不適応感が低いと考えられる。渡邊・平石（2007, 2010）の研究でも、自尊心スキルと不適応感との間で有意な相関関係が示されており、継続して自尊心スキルを用いることの重要性が示唆されたと考えられよう。

【まとめと今後の課題】

本研究は中学1年生から中学3年生（Time1）とその母親を対象に、母親の養育スキルの変化と子どもの心理的適応との関連について縦断的に検討した。その結果、道徳性スキルはTime2よりTime4の方が、理解・関心スキルはTime1とTime2よりTime3とTime4の方が有意に得点が減少していた。母親は子どもの成長・発達に伴って、相互調整的に心理的距離をおいて、関わっ

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

ていることが明らかになった。自尊心スキルについては、有意差が認められなかったことから、母親は子どもの成長・発達に関わらず、肯定的なメッセージを与えていると考えられる。次に、Time1からTime4の道徳性スキル、自尊心スキル、理解・関心スキルをクラスタ分析した結果、約70%の対象者は3スキルとも子どもの成長・発達に関わらず安定して用いていることが明らかになった。しかし、理解・関心スキルについては不安定なクラスタ群もあり、その要因や影響について詳細な検討が必要と思われる。さらに、3スキルのクラスタ群と自尊感情、不適応感との関連を検討した結果、自尊心スキル高群は低群と最低群より不適応感の得点が低かった。中学生から高校生にとって、母親の肯定的なメッセージや自立・成長を促進する行動は重要であることが示唆された。

今後の課題として、本研究は4時点での調査であったため、調査対象者が少数になった。調査対象者を確保するための調査方法が必要であったと考えられる。また、各時期の調査対象者は3学年にまたがっているため、Time1が中学1年生から中学3年生、Time2が中学2年生から高校1年生というように、学年が重なることになる。これは学年による変化という面では正確に捉えていないと思われる。今後は1学年に焦点をあてて、縦断的に調査をする必要があるだろう。さらに、母親の養育スキルを用いている頻度の個人差については、クラスタ分析だけでは明らかにされていないと考えられる。個人差を詳細に検討するためには面接調査を用いて研究を進めていく必要があると思われる。

【引用文献】

- Baumrind,D. (1967). Child care practices anteceding 3 patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 75, 43-88.
- Baumrind,D. (1980). New directions in socialization research. *American Psychologist*, 35, 639-652.
- Baumrind,D. (1991). Parenting styles and adolescent development. In R. M.Lerner,A.C.Petersen, & J.Brooks-Gunn (Eds.), *Encyclopedia of Adolescence, Vol. II*, Garland Publishing.

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討 (渡邊・平石)

- Holmbeck,G.N. (1996). A model of family relational transformations during the transition to adolescence: Parent-adolescent conflict and adaptation. In J.A.Grabber, J.Brooks-Gunn, & A.C.Petersen (Eds.), *Transitions through adolescence: Interpersonal domains and context* (pp.167-199). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- 小高恵 (1994). 親子関係と人格要因との関連性についての一考察 性格心理学研究, 2, 47-55.
- 小高恵・紺田広明 (2015). 中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析－動的因子分析を適用して－ 青年心理学研究, 26, 109-128.
- Laursen,B., Coy,K.C., & Collins,W.A. (1998). Reconsidering changes in parent-child conflict across adolescence: A meta-analysis. *Child Development*, 69, 817-832.
- Maccoby,E., & Martin,J. (1983) . Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E.M.Hetherington (Vol.Ed.) &P.H.Mussen (Series Ed.) , *Handbook of child psychology : Vol.4. Socialization, personality, and social development* (p.1-101) . New York: Wiley.
- McGue,M, Elkins,I, Walden,B. & Iacono,W.G. (2005) . Perceptions of the Parent-Adolescent Relationship: A longitudinal Investigation. *Developmental Psychology*, 41, 971-984.
- 宮本幸子 (2009). 子どもを取り巻く人間関係－親子関係－ 第2回子ども生活実態基本調査報告書 ベネッセ教育研究所, pp33-41.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 (2003). 中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究 コミュニティ心理学研究, 7 (1), 35-46.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44 (1), 11-22.
- 岡林秀樹 (2006). 発達研究における問題点と縦断データの解析方法 パーソナリティ研究, 15 (1), 76-86.
- Steinberg,L. & Silk,J.J. (2002). Parenting Adolescents. In M Bornstein (Ed.),

- 青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）
Handbook of parenting (2nd ed.) Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
Pp.103-133.
- Steinberg, L. & Steinberg, W. (1994). *Crossing paths-How your child's adolescence triggers your own crisis*. New York: Simon & Schuster.
- 辻岡美延・山本吉廣（1976）. 親子関係診断尺度 E I C A の作成 関西大学社会学部紀要, 7 (2), 1-14.
- 辻岡美延・山本吉廣（1977）. 親子関係の相互認知－小嶋氏の原資料の一分析－教育心理学研究, 25, 18-29.
- 渡邊賢二・平石賢二（2007）. 中学生の母親の養育スキル尺度の作成－学年別による自尊感情との関連－家族心理学研究, 21, 106-117.
- 渡邊賢二・平石賢二（2009）. 母親の養育スキル尺度の妥当性の検討－子どもの成長に対する認知・感情, 思春期の子育て態度との関連－名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要－心理発達科学－, 56, 57-64.
- 渡邊賢二・平石賢二（2010）. 母親の養育スキルと子どもの心理的適応に関する縦断的検討 家族心理学研究, 24, 171-184.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）. 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

青年期の子どもをもつ母親の養育スキルの変化に関する縦断的検討（渡邊・平石）

A Longitudinal Investigation on the Change in Adolescent Maternal Parenting Skills:
The Relationship with Adolescent Psychological Adjustment

WATANABE Kenji and HIRAISHI Kenji

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between the change of maternal parenting skills and psychological adjustment longitudinally. Participants were 123 junior high school students (58 boys, 65 girls). There were less morality skills of Time3 and Time4 than Time2, and less understanding-respect skills of Time3 and Time4 than Time1 and Time2. According to cluster analysis, most cluster groups were stable, and about 70% mothers stably used morality skills, self-esteem skills and understanding-respect skills in spite of the development of children. The high group of self-esteem skills indicated lower points than the low group of self-esteem skills and the lowest group for adolescent maladjustment feelings.

Keywords : maternal parenting skills, adolescent psychological adjustment, longitudinal investigation, change